

政治学者・憲法学者としての

# 植原悦二郎先生の業績

―明治憲法のイギリス・モデル解釈―

高坂邦彦

## 目次

はじめに	1	三、大正デモクラシーと植原悦二郎	
		吉野作造批判	6
		山県有朋批判	10
一、政治家としての植原悦二郎		四、植原悦二郎の憲法学	
五・一五事件と植原悦二郎	1	天皇機関説事件の意味	12
東條英樹との争い	2	植原悦二郎の象徴天皇論	13
終戦工作・戦後の植原	3	明治憲法のイギリス的解釈	14
政治家植原悦二郎の真骨頂	4	五、植原悦二郎の政治心理学	
		大正デモクラシーの崩壊	17
二、植原悦二郎の勉学		国民性と植原悦二郎の想い	19
向学の念で家出	6		
ワシントン大学	7		
ロンドン大学大学院	8	年譜	21
イギリス政治学者	8	資料案内	23

## はじめに

植原悦二郎先生は立派な政治家でしたが、じつは、先生は政治家としてよりも、政治学者・憲法学者としての方に貴重な存在意味があるのです。

今まで、このことは憲法学の専門家にさえ知られてきませんでした。このたび、法律学専門の出版社（信山社）で発行している日本憲法史叢書の一冊として『植原悦二郎』が出版されました。この憲法史叢書は、金子堅太郎・穂積八束・美濃部達吉・佐々木惣一等等、有名な憲法学者たちの論説集です。植原先生の論説集がこの叢書の一冊として刊行されたのは、先生の唱えた憲法学説が憲法学史上の重大な意味があるからです。

植原先生は、一般的にはドイツ的だといわれていた明治憲法をイギリス・モデルで解釈しました。そして、その内容は戦後の新憲法にそっくりだったのです。この冊子は、そのことをできるだけ分かり易く説明するために書いたものです。

## 一、政治家としての植原悦二郎

### 五・一五事件と植原悦二郎、

そうは言っても、植原悦二郎先生は政治家だったわけですから、最初に政治家としての植原先生のことを少しだけ説明しましょう。

植原先生は大正六年に犬養毅の国民党から立候補して国会議員になりました。先生を国民党党首の犬養毅が熱心に説き伏せたのです。先生は大学教授だったので最初は嫌がっていたのですが、「教壇で学生に教えるよりも、国会議員になって国民を導いた方が議会政治の発展の為に」<sup>1</sup>という犬養毅の説得で心をうごかされたようです。

犬養毅の国民党は藩閥政治批判の少数野党でしたから、やはり藩閥政治を批判し議会政治の発展を願っていた植原先生とは考えが合っていたのです。

ところが、その犬養毅が昭和七年に起きた五・一五事件で殺されてしまいました。植原先生は、この五・一五事件の時に、ピストルで撃たれて瀕死の状態だった犬養首相のもとへ、まっ先にかけて介抱し最後を看取った人です。植原先生はあの有名な犬養毅から最も信頼され、頼りにされ、期待されていた人だったのです。

この事件は若い軍人たちが起こしたのですが、当時の内閣書記官長（今は官房長官といいますが）だった森恪という人は、同じ官邸内の廊下続きの部屋にいるのに、犬養首相の枕元にいる植原先生に四・五分おきに電話をよこして死んだかどうかを聞くだけで、部屋には来ませんでした。森は犯人側と通じている…。植原先生にはそれがわかりました。

植原先生の地元三郷村の神谷博さんは熱心な植原支持者でした。その神谷さんが事件のあった年のお盆に、植原先生に誘われて一緒に犬養毅の新盆見舞いに行きました。先生は霊前で合掌したまま長い時間、全然動きません。先生の後ろに座っていた神谷さんが不思議に思っつと見たら、こわいもの知らずの先生なのに泣いているのです。神谷さんは、先生の深い悲しみをしみ

じみと感じ、これからの先生の苦勞を心配しました。

五・一五事件は、それまでに折角伸びてきた政党政治・議會政治の息の根を止めた事件で、その後の日本は、国際連盟脱退（昭和八年）、天皇機関説事件（昭和十年）、二・二六事件（昭和十一年）、日中戦争（昭和十二年）、太平洋戦争（昭和十六年）と軍国主義・全体主義一色になっていきましたから、自由主義者の植原先生にとっては苦難の連続でした。

戦時中に東條英樹首相と争ったのは、その典型的な例です。

### 東條英樹との争い

植原先生は戦時中に行われた翼賛選挙で落選しましたが、それは、時の権力者東條英樹首相に強烈にたてついたので仇をとられたからです。国会の予算委員会でこう言って東條首相を責めました。

「他国との戦争というものは勝つという確信があつてやるべきものだ。東條首相は英米に本当に勝てると思つているのか。中国との戦争でさえ勝てないでわが国苦しんでいるではないか。もともと、英米の国家総力はわが国の十数倍なのにまだ無傷だ。それにひきかえ、わが国の国力はすでに尽きた。」

それに、わが陸軍がいかに勇敢だといつてもサンフランシスコに上陸して首都ワシントンまで大陸を横断して攻撃することなどできはしない。わが海軍がいかに優秀でも、テムズ河をさかのぼつてロンドンを襲撃することなどできない。

日本は英米との戦争に勝てる筈はないのだ。この戦争は外交によつてすみやかに終わらせるべきである。東條首相にはその覚悟があたりか…。」

これを言ったのは英米との戦争は始まったばかりで、日本はまだ勝つていた頃のことです。「非国民だ」「発言を取り消せ」という声で議場はたちまち大混乱です。これに対して植原先生は、「私の質問は国を思う一念からである。断じて発言は取り消さない」といつて譲りませんでした。議事録のこの部分は削除されてしまいました。

その後に行われた総選挙では、植原先生を応援すると国賊扱いされて片っ端から警察に拘留されるので誰も近づきません。植原先生は壇上で叫びました。

「私はこの選挙に敗れるであろう。しかし、私があらゆる迫害をおしのけて叫び続けることに、やがて諸君がなるほどとうなずかれる日がやってくるに違いない。そして、再び諸君と相まみえて政治を語る日が必ずやつてくるであらう…。」

この選挙は戦争礼賛の翼賛選挙といつて、日本の政治史上の大スキャンダルですから、植原先生が落選したのはかえつて名誉なことだったといえます。

### 終戦工作・戦後の植原

翼賛選挙に落選して、先生は国会議員ではなくなりましたが、「こんな戦争をいつまでも続けていたのでは日本という国が亡くなつてしまふ。早くやめさせなければならぬ」と考へて、終戦工作に走り回ります。一緒にやつた吉田茂や岩淵辰雄、植田俊吉等は証拠を握られて逮捕・投獄されましたから、これは危険なことでした。

戦後の植原先生は内務大臣になりました。内務省というのは、戦後になって、自治省、建設省、厚生省、労働省、警察庁、消防庁等々に分割されました。それほど大きな役割を受け持っていた役所でしたから、内務大臣というのは副首相格の重い役目です。

敗戦直後の日本政府は、連合国軍総司令部（これをGHQといいました）のいうとおりにしなければ

なりませんでしたが、植原大臣は素直に言うことをききません。言うことをきかなかった理由は、きょうここで皆さんにお話するのはむしろかすぎるので省きますが（註参照）、それが元で吉田首相ともだんだん仲が悪くなってやがて大臣を外されました。

新しい憲法を決めた時もそうです。もともと憲法学者だった植原先生にしてみれば、アメリカ側が主になって作った原案には欠点がいくつかあります。

植原先生が原案に反対した理由は、自衛権の規定や地方自治の規定が不十分だということでしたが、最近になってそういうことがさかんに言われだしました。植原先生は制定する前からすでに問題にしていた人なのです。

けれども、憲法の冒頭には国務大臣植原悦二郎の署名があります。当時は憲法制定を急がないとソ連その他の国の考えも憲法の内容に盛り込まれるという国際情勢だったので、植原先生は、それよりはままだということとで原案をのんで署名したのです。

註、占領開始直後のGHQ民政局のスタッフにはニューデイラーが多く、彼らは社会主義的な色彩の占領政策をすすめるようとした。その後、中国が共産化したことで軌道修正したアメリカ国務省は、ニューデイラーたちを罷免し帰国させた。植原と面接して人物査定をしたGHQ民間情報局長のケン・ダイク准将はその典型的な人物で早期帰国組である。植原は自伝にケン・ダイクのことを、「この人は共産主義者ではないかと思った」と書いている。植原は自由主義者であって、社会主義や共産主義の政策には反対だった。

### 政治家植原悦二郎の真骨頂

植原先生は長いあいだ国会議員をやったのに、総理大臣にも、党の総裁にも、それどころか派閥のボスにすんなれませんでした。しかも、先生を支えた地元のために道路や橋や建物を作ってくれたわけでもありません。

それなのに、地元の人たちはなぜ、植原先生を尊敬し支援したのでしょうか。同じ政治家として身近に接していた榎橋渡という人が、その理由を次のように新聞に書きました。

私が植原悦二郎を好きなのは彼が個性ある政治家だからである。この筋を通す男は一見頑固に見えて、筋が通ればサラリと妥協する淡泊性を持っている。

彼は子分もなく、信州人特有の激しい性格は一言居士の異名を頂戴している。ボスの意味の「大物」としては落第である。彼が一言居士として皮肉と毒舌を飛ばさず、茫洋たる一面をもっておれば今頃は一党の総裁くらいにはなれたかもしれない。

しかし、彼は日本政界ではボスになれない男である。また、なろうともしない。彼が政界に容れられぬ大きな原因は筋を通し過ぎるからである。筋が通らぬことを否定して道理をたてる気風の国ならば彼も大きく支持されたかもしれないが、逆に日本の政界では筋の通らぬことが平気でのさばっている国だから煙たがれる。考えてみれば、もし彼が第二の祖国英国に生まれていたら日本よりもっと政界に幅をきかしているかもしれない。

本来「人間の価値」と「出世」とは別物である。いかに出世しておっても軽蔑に値する人間もあれば、いかに不遇にあっても尊敬を払うべき人間もある。植原悦二郎は恵まれた政界人ではない。彼は自己の栄達のために権力と妥協はせぬ。時には一身の不幸をかえりみず敢然と闘う志士の風格を持っている。これが時には彼を逆境に陥れ出世を取り逃がす原因ともなる。しかし、そこに植原の植打ちがある。今や日本の政界に

功利主義が横行し、世渡り上手な人間が偉いと錯覚され、次第に国士的風格が失われている時、植原悦二郎の存在を再認識する必要がある。

軍を恐れて誰も批判しなかった天皇機関説事件を堂々と批判した新聞記者だった阿部真之助は戦後にNHK会長になりましたが、彼は植原先生の追悼誌に最大限の敬意を込めてこう書いています。

私は長いこと、記者として数え切れないほど多くの政治家をみてきた。しかも年とともに政治家の品性が墮落していくのを悲しみながらみてきた。植原さんのような高潔な政治家は種切れになると思うとたまらなく淋しい気持ちになる。

ここで植原先生は高潔だったと言っていることの意味は、先生は筋を通した、私利私欲や権力欲がなかった、お金にきれいだったという意味です。

## 二、植原悦二郎の勉学

### 向学の念で家出

植原悦二郎先生は、一八七七年（明治十年）に明盛村中萱（現在は三郷村）に生まれました。明治十年ですから、その十年前はまだ江戸時代で、皆ちよんまげ頭だったというわけです。

先生は母親に大切に育てられました。たいへんに癩の虫の強い子だったので、まじない師の所で臍の周りに墨を塗って祈祷してもらったこともあるそうです。五歳の時にはもう百人一首をそらんじることができたといえますから、生まれつき頭がよかったです。でも、小学校一年生の時は今でいう登校拒否でした。二年生になってからようやく登校できたといえます。上級生になると腕白なガキ大将になりました。

絵以外の先生の成績はトップでしたが、生まれた家は明治の始めに事業に失敗して財産を失くしてしまっていたので、先生を松本の中学（今の深志高校）に通わせることができませんでした。先生は小学校卒業後、家で農業の手伝いをさせられました。昔の農家の忙しさは皆さんの想像の外です。田植えも田の草取りも稲刈りもみな人間の手でやりましたから、いくらやってもはかどりません。おまけに養蚕もしましたから大忙しです。年がら年中、朝早くから夜暗くなるまで働きづめでした。

しばらくは我慢してそういう生活をしていましたが、勉強したいという気持ちが強く、その目的のために横浜にいる叔父を頼って家出をしました。ところが、母親が悲しがつて切々たる手紙をくれるのですから、やむなく家に帰りました。しかし、どうしても勉強がしたくて、二年後にまた家出をし、横浜で働きながら独学で英語を身につけました。

### ワシントン大学

英語だけでなく国語や歴史など全部を独学で身につけましたが、植原先生は小学校しか出ていませんから、当時の日本では大学に入れてもらえませんでした。それで、植原先生はアメリカの

大学で勉強することにしました。

着いたシアトルには、ちょうど開校したばかりのハイスクールがあつたので、そこへ入学して学び、やがてワシントン州立大学へ入学しました。

同じ頃、穂高から同じシアトルにたくさんの労働移民をした人たちがおり、言い尽くせないほどの苦労をしましたから、植原先生もさぞやと思いきや、先生は日本からの移民相手に雑誌を発行したり、劇団をつくって日露戦争の劇などでかせいだりして、余裕のある生活だったようです。人望もあつて、学生なのにシアトル日本人会の副会長でもありました。

傑作なのは彼が仕組んだ日米武道試合です。日本の柔道家とアメリカのレスリング選手との試合で一儲けをしようと思つたのです。ところが、柔道家というのが口先ばかりの男で簡単に負けてしまったので、植原先生は今までにかせいだ金を全部失う大損をした、なんてこともありました。

穂高町からの労働移民だった清澤浏という人は、その時に日本字新聞の新聞記者になっていましたから、この試合の宣伝をしてくれました。後に大成して有名な外交評論家になりました。今日では『暗黒日記』の著者として知られています。清澤浏はこの試合のことを日本にきてからも書いています。彼の『暗黒日記』には、植原先生が終戦工作に奔走したこともくわしく書かれています。

植原先生はその清澤浏をとてかわいがりしました。清澤浏さんの奥さんは植原さんが紹介した女性です。その奥さんは関東大震災で亡くなりましたが、再婚した女性も植原先生が紹介した人です。植原悦二郎と清澤浏の二人は仲のよい間柄でした。

植原先生は、自分が損をしたり不利な立場になることも構わずに相手にぶつかるといふ癖がありました。若い時からそうだったようです。ワシントン大学の学生時代に、日本人売春婦撲滅運動をやつて、売春組織のヤクザに殺されそうになったこともあります。間一髪で逃げる事ができました。

### ロンドン大学大学院

植原青年はワシントン大学を卒業しましたがまだもの足りません。今度はイギリスに渡ってロンドン大学の大学院(London school of Economics and Political Science)に入りました。略してLSEといわれるこの大学院はレベルの高い世界的な大学院で、ノーベル賞を受賞した教授がたくさんいます。

植原悦二郎はここできわめて熱心に勉強して博士号をとりました。彼の博士論文「日本政治発展史」The Political Development of Japan 1867-1909 は教授の推薦を受けてロンドンで出版されました。

植原先生のお孫さんがアメリカに住んでますが、奥様はイギリス人で、この人のいうことには、植原先生の英文の論文はイギリスの上流階級の使う格調高い英文なのだそうです。

先生は指導教授からロンドン大学の講師として教えたかどうかと勧められました。これは陸奥宗光の息子広吉の裏切りで不可能になりましたが…。

皆さんはこういう話をきいてもあまり驚かないでしょうが、同じ頃にロンドン大学へ留学した夏目漱石は、東京帝国大学を卒業した英語の先生で、英文学の勉強に行ったというのに、レベルが違いすぎてノイローゼになってしまったことと比べてみれば、植原先生がいかに優秀な人だったかということが分かるでしょう。

## イギリス政治学者

植原先生は明治四十三年の暮に帰国しましたが、植原先生が学んできたアメリカやイギリスに比べると、日本の学問も政治も、とんでもなく遅れていました。封建的な藩閥政治の時代で、政府も国民も本来の議会政治の姿が分かってはいません。

そこで、植原先生は帰国約一年後の明治四十五年一月に『立憲代議政体論』という本を発表しました。

この本の書名は「憲法にのっとった議会政治」という意味です。この本は文語体で書かれていますが、福沢諭吉の『学問のすすめ』のように分かり易く、しかも、日本語の教育は小学校で受けただけの人なのにきわめて格調の高い文章です。

植原先生は、議会政治を健全に発展させるためには、国民に本当の議会政治の考え方や知識を教えることが必要だと考えて、国民向けにこの本を書いたのです。同時に、いろいろな雑誌にも藩閥政治の批判などを書いて発表しました。

ところが、植原先生の考えは当時の日本の藩閥政府やその御用学者たちにとっては迷惑な学説ですから、彼らは植原悦二郎の説を意識的に無視し続けました。先生は当時の日本の政治学者としては桁違いの学識を持っていたのですが、国立大学の教授にはなれませんでした。日本の学者世界にとっては、植原先生の学説が気に入らないのと、日本で植原先生の学歴は小学校卒業だけなので学歴差別です。

私立の明治大学が採用して、憲法や政治学の講義を受け持たせてくれました。すると、植原先生の講義は学生たちに大人気で大教室に入りきらなくなりました。そのせいで、他の憲法教授や社会学教授の教室はガラ空きになってしまいました。

それを妬んだ両教授の策動によって、明治大学は学生を巻き込んだ大騒動になりました。学生はみんな植原先生の味方をしたのですが、同僚の裏切りと陰謀を知った植原先生はさつさと明治大学を辞めてしまいました。これは、当時の新聞紙上でも話題になったたいへん有名な事件です。

## 三、大正デモクラシーと植原悦二郎

### 吉野作造批判

私たちは、歴史の授業で大正デモクラシーについて学んだ時に、吉野作造の民本主義というのを教わりましたね。大正デモクラシーといえば吉野作造の民本主義というくらい有名ですよ。

植原先生は、吉野作造がこの民本主義という考えを発表した時に、徹底的な批判をしています。今日の目からみれば植原先生の批判は、全面的に正しいのですが、当時は吉野作造にも他の学者にも問題にすらされませんでした。植原さんがまだかけだしの在野の学者なのに対して、吉野作造は名にしおう東京帝大の政治学教授だったというせいもあります。当時の日本の学問の水準が低かったのに、イギリスで学んだ植原先生はその水準をはるかに越えていたせいなのだと思います。

このことはじつに興味ある事実なのですが、きょうここでお話するには複雑すぎますから省きます。興味のある人は、信山社から発行された『日本憲法史叢書・植原悦二郎集』に、植原先生が書いたその論文が載っていますから読んでみて下さい。植原先生の文章はきわめて明快ですから誰でも内容を理解できると思います。イギリス帰りの先生がいかに優れた学者だったかということや、先生が当時の日本の政治や学問の遅れた様子にいらだっていたことが分かる文章です。この本には、詳しい解説も載っていますからあわせて読んでみて下さい。

### 山県有朋批判

イギリスで民主的な議会政治の理論や実際の姿を学んできた植原先生にしてみれば、当時の日本の政治はとんでもなく封建的で非民主的な状態でした。皆さん、よく知っている藩閥政治だったのです。政府の首脳は明治維新をやった薩摩や長州出身者ばかりだったのです。

それでも、伊藤博文が生きている間はまだよかったです。有名な司馬遼太郎という人が書いた『跳ぶが如く』という小説や『明治という国家』には、伊藤博文はじめ明治政府の人物の特徴が分かり易く書いてあります。伊藤博文に比べれば山県有朋はずいぶん悪く書かれています。

植原先生は、まだ山県有朋が生きていて政治と軍事の実権を握って権力をほしいままにしているというのに、遠慮会釈なく強烈な批判を書きました。

伊藤公（公は尊称）に比べれば、人物人格、学識、識見、政治思想のいずれの面でもはるかに伊藤公に及ばぬ山県公が伊藤公よりはるかに権勢をふるい、法をないがしろにしている。伊藤公は憲政の健全な発達を願っていたし、山県公のような陋劣な陰謀奸策を弄しはしなかった。後日の歴史家は山県公のことを真にわが皇室、国家、国民のための政治家であったとはいわぬであらう。

よくもここまで言ったものだといびっくりします。植原先生が山県有朋をこのように批判したことは、まかり間違えば命さえ狙われかねない危ないことでした。先生はこわいもの知らずの人だったのです。

その山県有朋の御用学者だった、東京帝大の憲法学教授・上杉慎吉に対してはこう批判しています。

上杉博士は我が国憲法学のオーソリティーときいているが、博士の憲法論を読むほどに、博士は現代における立憲政治とは何を意味するか、また、立憲政治と専制政治との区別さえ理解しておらぬことが分かった。上杉博士の理論は何が何やらさっぱりわからない。学者の理論として批評する価値などない。

この上杉慎吉は、後年になって同じ東京帝大の憲法学教授・美濃部達吉を天皇機関説事件で失脚させるように陰謀を働いた人です。その天皇機関説事件は昭和十年のことですが、植原先生が上杉慎吉のうさん臭さを批判したのは、それより二十年前の大正五年のことでした。

植原先生はこのように、自分が納得できない理論や人物に対しては容赦なく厳しい批判をしましたから、『大正デモクラシー』という本を書いた松尾尊允という歴史学者は、植原先生のことを「急進的自由主義者」と名付けています。（註、京大教授だった松尾尊允氏と植原悦二郎とは遠い親戚関係にある。）

植原先生の言っていたことは、当時の日本では急進的だったかもしれませんが、今の考え方からみれば、急進的でも何でもありません。穏健で保守的なイギリス自由党のありようを理想としていた自由主義者でしたから、軍国主義や社会主義や共産主義などの全体主義を極端に嫌っていました。

「大正期の急進的自由主義者だった植原先生は、戦後になって保守主義者に転向した」という人もいますがそうではありません。植原先生は終始一貫してイギリス的な自由主義者だったので、日本の世相が戦前の右から戦後の左にと極端に変わって、見る方向が逆になったので、真ん中の植原先生が逆に左から右に変わったかのように見えるだけのことなのです。

#### 四、植原悦二郎の憲法学

##### 天皇機関説事件の意味

皆さんは日本史の授業で、昭和十年の天皇機関説事件というのを習いましたね。

それまでは権威ある正統説だとされていた美濃部達吉博士の天皇機関説が、突然、国会で反国家的・国賊的な学説であると決めつけられて、美濃部達吉が地位も名誉も剥奪された事件です。

明治憲法の第一条には、「日本を統治するのは天皇だ」と書いてあります。そして第二条には、「天皇は神聖にして冒すべからず」と書いてあります。天皇は神聖だということで、天皇は神なのだ、日本は天皇が主権をもっている国だといったのが、さっきの上杉慎吉という学者の天皇主権論です。

ところが、第四条には「天皇は憲法を守って統治する」と書いてあり、その「憲法を天皇が勝手に作ることはできない。憲法の改正は国会で決める」と第七十三条に書いてあります。つまり、天皇は憲法に従わなければならないが、その憲法は国民の代表による国会で改正できるというのですから、国民が天皇を制約できるはずで、主権は国民にあることになります。これを国民主権論といいます。

けれども、明治憲法は天皇主権だ、というのが当時の常識のようなものでしたから、国民主権だなどという面倒な騒ぎになります。美濃部達吉はそれを警戒したのでしょう。国民主権のことを「国家主権」と言い替えました。

美濃部批判の国会議員は美濃部に対して、「お前は国家主権だと言うが、自分で、国家は国民の集まりだといっているではないか。つまり国家主権というのは国民主権といっているのと同じことじゃないか。天皇主権を否定するとはけしからん」といって非難し、天皇機関説を葬ってしまったのです。

じつは、大正期の頃の実際の政治の実権は政府や議会がもっていて、天皇は実際の政治には関わらずに形式的にそれを認めるだけでした。つまり、天皇も国会や政府の機関と同じように政治システムの一機関だという考えなので、これを天皇機関説といったのです。この説の方が、皇室も政府も従っていた正統説だったので。

この天皇機関説は議会政治を發展させるための理論でしたから、これがつぶされたことよって、その後の日本の政治は軍の思うがままになりました。軍人は事件の翌年に軍事クーデター二・二六事件を起こして、軍の気に入らない政治家を殺しました。あとは軍国主義一辺倒になって、日中戦争と太平洋戦争を始めたのです。「天皇陛下は神様だ。この戦争は神風が吹いて必ず勝つ。」戦争中はこんな神がかりの言葉が叫ばれました。

### 植原悦二郎の象徴天皇論

私たちは、戦後の新憲法に比べると明治憲法はとんでもない悪法だったと思っていますが、植原先生にいわせれば、明治憲法そのものが悪かったわけではなくて、解釈と運用がおかしかったのです。

憲法のことを英語では *constitution* といいますが、この単語には日本語の「法」という意味はありません。構造とか体質とかいう意味です。つまり、長い間に積み重ねられて出来上がってきた、政治の仕組みや体質・慣習のことを *constitution* というのです。だから、イギリスには文章に書かれた憲法というものが無いのです。慣習でやるから慣習法とか、文章に書いてないから不成文法といえます。

だから、イギリスの *constitution* の内容は、イギリスの政治の実際的なやり方を知らないという理解できないわけです。植原先生はイギリスでそれを研究してきたのですから、当時の日本では只一人それがよく分かっていたわけです。

その植原先生が読むと、明治憲法は当時の国立大学の憲法学者たちの解釈とは違う解釈になります。例えば、「天皇は神聖にして冒すべからず」という条文は、「天皇は神である」という意味なんかではなくて、イギリスでいう「国王には間違いを冒させない」政治には関わらせない」という意味になります。つまり、戦後憲法の象徴天皇・現在の天皇のようになります。象徴は英語で *symbol* といいますが、植原先生は明治四十三年にロンドン大学に提出した博士論文に、「天皇は全国民に同胞という感情をいだかせる *symbol* である」とはつきり書いてあります。つまり、植原先生は明治憲法の時代に、天皇は象徴だとはつきり書いたのです。このことはべつに驚くにはあたりません。イギリス国王がそういう存在であることを植原先生は知っていたからです。イギリス人は国王が神だなどと誰も思っているわけではありませんが、国王を敬愛し尊重しています。「神よ、王を守り給え」という歌は、「神よ、我が国を守り給え」という気持ちで歌っているのです。

植原先生は明治四十五年に発行した『立憲代議政体論』という著書で、このことをじつに懇切丁寧に説いています。専制国のロシア皇帝よりも立憲君主国のイギリス国王の方がはるかに国民から親しまれ尊敬されている事実などを説明して、天皇はイギリス国王と同じで、政治に関わらせてはならない、それが皇室を重んじ安泰に保つ道だと書いています。

### 明治憲法のイギリス的解釈

中国の古典に「水は舟を浮かべるが、その舟を覆しもする」という言葉があります。民は王を支えるが、逆に、王を失墜させもするという意味です。このように、支えるか、支えずに失墜させるかという、民の総意のことを主権といいます。

美濃部達吉は昭和十年の天皇機関説事件の時に、国会で「自分は国民に主権があるなどということとは考えたことも、言ったことも、書いたこともない。自分の国家主権という理論は国民主権

論とは違うのだ」と弁明しました。彼は当初から国民主権論者だと受け取られることを非常に警戒していたのです。

ところが、植原先生の方は、明治四十五年に出版した著書『立憲代議政体論』に、はっきりと「主権は国民にある」と書いたのです。「憲法のどこを見たって主権が天皇にあるなどとは書いてない。国民にあるなどということも書いてない。主権が国民にあるなどということは、憲法のある国では常識だからだ」というのです。明治憲法の時代に国民主権論を唱えた学者は植原先生だけです。

(註、植原の国民主権論を知らない人は石橋湛山が最初に唱えたというが、大正四年の湛山の国民主権論は、明治四十五年の植原の著作『立憲代議政体論』にある国民主権論の受け売りである。当時の植原は湛山が編集していた雑誌の常連執筆者で、湛山は経済思想に長じ、植原は政治思想に長じており、両者は親密な間柄だった。)

こういうと、植原先生が何だか突飛なことを唱えたかのように聞こえるかもしれませんが、ちゃんとした学問的な裏付けがあつての主張だったので。

中学や高校の歴史教科書には、明治憲法はドイツ(正確にはプロシヤ)憲法を真似したドイツ的な憲法であると書かれていますから、これが国民の常識のようになっていきます。

ところが、これはとんでもない誤解なのです。憲法草案を作ったのは伊藤博文と他の三名ですが、その中の一人・金子堅太郎という学者は、ハーバート大学でイギリス憲法とイギリスの思想家バークについて学んだ、本格的なイギリス法学者でした。

つまり、明治憲法はプロシヤの憲法とイギリス憲法の特徴をあわせもっていたのです。日本占領の仕事にあたるGHQ職員用にアメリカ政府が編集した『日本案内 Guide to Japan』には、「明治憲法はプロシヤの専制政治を父に、イギリスの議会政治を母にもった、両性の生き物である」と書かれています。

明治憲法の起草者・伊藤博文はドイツ・モデルを持ち込んだと思われていますが、彼自身があえて政党の党首となって首相をつとめたのは、明治憲法のもつイギリス憲法的な側面、つまり、イギリス的な議会政治の発展を意図したことだったのです。

ですから、ロンドン大学出身の政治学博士だった植原悦二郎先生が、明治憲法をイギリス・モデルで解釈したことは何ら突飛なことではないのです。

植原先生がその本を発刊した明治四十五年頃には、憲法制定当時にはいたイギリス派の憲法学者はいなくなつて、ドイツ派一辺倒になっていました。美濃部達吉の天皇機関説はイギリス的な議会政治の発展を意図した理論なのですが、それでも、論じ方はドイツ的でした。彼の憲法学者が、「頭はドイツ憲法、心はイギリス憲法」といわれたのはそのせいです。

そこで、植原先生はドイツ法学者たちの明治憲法解釈を徹底的に批判したので。藩閥政府の御用学者で神がかり的な穂積八束や上杉慎吉はもちろんのこと、美濃部達吉の天皇機関説をさえ批判しました。

じつは、天皇機関説というのは美濃部達吉の独創物ではありません。ドイツの学者がとつくに言っていたことですし、それに対して、カール・シュミットという学者が、「君主機関説というのは憲法上の主権が国民にあるのか君主にあるのかという問題を回避するためのものだ」といつているのです。吉野作造の民本主義というのはその通俗版です。

ですから、今になってみれば、植原先生の美濃部批判も吉野批判もすべて当たっていたことになりそうです。それに、戦後の新憲法による議院内閣という政治システムはアメリカ的ではなくイギリス・モデルなのです。つまり、植原先生のイギリス・モデル解釈の方がまともだったわけですね。先生は時代を半世紀以上も進んでいたということになりますね。

したがって、植原先生が明治四十五年という時点で明治憲法をイギリスモデルで解釈した『立憲代議政体論』は、憲法学の歴史上に貴重な本なのですが、全国に数冊しか現存していません。明治大学にも長野県立図書館にもないのです。たぶん、天皇機関説事件の頃か戦時中に、どここの図書館でも廃棄したのだらうと思います。

## 五、植原悦二郎の政治心理学

### 大正デモクラシーの崩壊

国会議員として植原先生がおやりになった仕事で一番の功績は普通選挙法の成立のために努力を重ね、大正十四年にそれを実らせたことでしょう。それは藩閥による専制政治から議会政治へ変えたいという、植原先生の年来の願いへの一歩前進でした。

植原先生は『立憲代議政体論』の末尾の頁にこう書いています。

世界の歴史をみれば、危険で弊害の大きい政治は、専制政治の国で行われた。専制政治家は自分が賢いと思っているので、人のいうことに耳をかさず、改めることもしない。

議会政治は民意にもとついてやるのだから、常識的で平凡で穏健なものである。議会政治だと国民が了解する範囲でしかできないのだから、国民一般の常識を越えることはできない。これは平凡であり、非進歩的なように感じるかもしれないが、専制政治より進歩的なのだ。

戦後育ちの私たちは、「明治憲法が非民主的だったので、日本は軍国主義になり、国民が戦争にかりだされた」と思っています。これは事実とは違う誤解です。大正後期には多数政党の党首を総理大臣にして議院内閣を作るのが慣行として定着し、それを「憲政の常道」といつてました。大正十四年には普通選挙法も成立し、マスコミや世論が支配する大衆社会だったのです。あとは、樞密院や貴族院などの非民主的な機関の改革も、マスコミと国民世論を背景にすれば不可能ではなかったでしょう。

ところが、最初の普通選挙が行われた昭和三年頃から、この政治体制が崩壊しはじめました。政党内閣は国際協調政策だったのに、この政党政府に逆らう軍部の方に、国民は喝采を送ったのです。

これはマスコミのせいです。新聞は「政党の腐敗」を誇張して報道する一方で、軍による満州事変の戦果をかき立てました。国民は選挙で政党を支持する代わりに、喝采で軍部を支持したのです。

戦後になってから、「新聞は戦争に反対で抵抗したが、抑圧され規制されて従わざるを得なか

った」といいましたがそんなことは嘘です。規制されたのはずっと後のことで、満州事変の時の新聞は、軍の満州進撃を賛美し、「軍の独断で国外出兵することができる制度には問題があるが、政府は早く追認すべきである」と書いて、国際協調策の政党内閣（若槻内閣）を責めたのです。軍が独断で国外出兵することができるというのは、統帥権のことを指しているのでしょうか、これは書いた記者の間違いです。天皇の統帥権というのですから、事前に天皇の裁可がなければ重大な違反行為なのです。

じつは、軍首脳は、国民とマスコミが満州事変を否定的に受けとめて軍を批判することを心配していたのです。ところがあにはからんや、始めてみたら新聞は大喝采です。これで軍は増長しました。

犬養毅が殺された五・一五事件はその延長線上の事件です。犯人たちは裁判で「自分たちは政党政治家が腐敗しているから殺したんだ」と主張し、世論はこういう犯人たちに喝采をおくり同情しました。

軍人が国家の首相を殺したのですから、軍法会議で死刑になって当たり前なのに、みな禁錮何年とかの軽い刑で数年後には恩赦で釈放です。世間の目は、犯人の方が正義で、殺された犬養首相の方が悪人だといわんばかりで、家族は外を歩きたびに肩身のせまいおもいをしたと、孫の犬養道子さんがどこかに書いていました。

それやこれやで増長した軍部は、その後、次々に勝手な専制政治を進めました。ですから、さつき説明した天皇機関説事件も、二・二六事件も、元を糺せば、政党政治を批判し軍に喝采を贈ったマスコミとそれを鵜呑みにした国民世論だったのです。

#### 国民性と植原悦二郎の想い

植原悦二郎先生は、『立憲代議政体論』の最終章で、次のように日本人の国民性の分析をしています。

- ①日本人はとにかく戦争が好きである。日清・日露の両戦争の勝利はそれに拍車をかけた。
- ②論理的にもこのことを考えず、感情的に判断する。
- ③ものを率直に言わず、陰険である。
- ④平気で嘘を言う。約束をやぶる。
- ⑤ものごとや思想の奥にあるものを研究せずに、形だけを真似る。
- ⑥独立自尊の気概が乏しく依存的で服従的である。
- ⑦率直な相互批判が嫌いで不得手である。
- ⑧人を人として大事にすることをせずに、階級や金銭で人を測って接する。
- ⑨理想が低い。目先の自分の利にしか関心がなく、社会とか人類とかに対する関心がない。
- ⑩事実よりも外見を重んずる。虚飾・虚栄心が強い。
- ⑪歴史から学ぶことができない。歴史の事実を抹殺したり改ざんしたりすることが平気である。

これらの一つ一つを事例をあげて説明したあと、最後に「要するに常識がないのだ」とまとめています。この場合の常識というのは、知識という意味ではなく、コモンセンスという意味です。

長い年月、外国で暮らして帰国した植原先生には、日本人の持つこうした欠点がいやでも目に

ついたのでと思いますが、法律と政治の本にこんなことを書いたのは、植原先生を指導したイギリスの学者の影響でしょう。

植原悦二郎先生を指導し、博士論文を出版してくれ、そのうえ講師に迎えようとしてくれた、ロンドン大学LSEのウォーラス(Graham Wallas 1858～1932)教授は、世界的な権威のある政治学者です。例えば、今の東大総長の佐々木毅教授の著書『現代政治学の名著』は、世界的な学者十五名について解説したのですが、その冒頭にウォーラスが紹介されています。植原先生はそういう優秀な教授に学び、認められたというわけです。ウォーラスはこう考えました。

イギリスの選挙権が拡大して庶民大衆も投票できるようになったのはいいが、彼らはあまりにも見識が足りないので、うさん臭い候補者にだまされて投票している。だから、まともな候補者の方が落選して、イギリスの政治の質は下落しつつある…。

これを防ぐために、庶民に対する教育の質を高める必要がある。そうすれば、選挙民はいかがわしい候補者の嘘を見破れるようになるだろうし、そんな候補者の演説に酔っている自分を恥ずかしく思うようになるだろう。

植原先生がやりたかった本来の研究や活動の方向は、このウォーラスのような問題意識だったのではないかと思えます。議会政治のよさと必要を説いたこの本の最後の頁の最後の一行に、植原悦二郎先生はこう書きました。

「されど、常識に富まざる国民は代議政治の妙味を知る能はざるべし。」昭和初期から終戦までの日本人は、まさにそのとおりでした。私たちは、それを昔のことだといって笑うわけにはいきません。私たちには、植原先生の言った常識(コモンセンス)ということが、いまだによくわかってはいないと思うからです。

[完]

### 植原悦二郎先生年譜

- 一八七七年(明治一〇年) ○歳 南安曇郡明盛村中萱に生まれる。父繁太郎・母つじの次男。
- 一八八四年( 一七年) 七歳 明盛村中萱の明盛学校へ入学。
- 一八八八年( 二一年) 一一歳 高等小学校へ入学(南安曇郡立高等小学校)。
- 一八九二年( 二五年) 一五歳 同右 卒業 家居(農作業に従事)。
- 一八九三年( 二六年) 一六歳 独学の目的で横浜に出奔。母親の懇願に応じて帰郷。
- 一八九五年( 二八年) 一八歳 諏訪龍上社製糸工場勤務(検番)。
- 一八九八年( 三一年) 二二歳 再度横浜に出る。英語を修め大蔵省税関監吏補試験に合格。
- 一八九九年( 三二年) 二三歳 渡米 シアトルにて古屋政次郎の恩顧を得る。
- 一九〇〇年( 三三年) 二四歳 小学校八学年に入学し三カ月の在籍後にハイスクールに転入学。
- 一九〇三年( 三六年) 二七歳 新設ハイスクールに転校し第一期卒業生となる。

一九〇四年（ 三七年） 二七歳 ワシントン大学に入学。  
一九〇七年（ 四〇年） 三〇歳 同右 卒業 渡英してロンドン大学LSEに入学。

指導教授は有名な政治心理学者 Graham Wallas (1858-1932)  
太田丑太郎ならびに古屋政次郎が留学費用を支援した。

一九一〇年（ 四三年） 三三歳 論文 Political Development of Japan 1968-1910 にて学位取得。  
右記の論文がロンドンの Constable 社から出版される。年末に帰国。

一九一一年（ 四四年） 三四歳 蔵前高等工業（現東京工大）英語講師（明治四四年〜大正二年）

一九二二年（ 四五年） 三五歳 『通俗立憲代議政体論』（博文館）を上梓。

一九二三年（大正 二年） 三六歳 山田照子と結婚。明治大学講師（大正2年〜大正七年）。

一九二六年（ 五年） 三九歳 『日本民権発達史』（政教社）を上梓。

一九二七年（ 六年） 四〇歳 国民党から衆議院選挙に立候補し当選。

一九二八年（ 七年） 四一歳 明治大学講師から同教授となる。立教大学講師（大正七〜一〇年）

一九二九年（ 八年） 四二歳 妻照子病没。武田彰子と再婚。

一九二一年（ 一〇年） 四四歳 植原・笹川事件により明治大学教授を辞任。

一九二三年（ 一三年） 四七歳 加藤高明内閣の通信参与官（通信大臣は犬養毅、次官は古島一雄）

一九二四年（ 一四年） 四八歳 犬養毅首の政友会合同に伴って政友会所属の国会議員となる。

一九二七年（昭和 二年） 五〇歳 田中義一内閣の外務参与官（外務大臣は首相が兼務、次官は森恪・

吉田茂）

一九二九年（ 四年） 五二歳 パリ不戦条約の文言 in name of people（国民の名において）が天皇  
の大権違反であるとう批判に対して植原が反批判したことが問題化  
して参与官を辞任。

一九三二年（ 七年） 五五歳 衆議院副議長。五・一五事件で狙撃された犬養毅を看取る。

一九四二年（ 一七年） 六五歳 予算委員会で首相東條英樹を批判。翼賛選挙落選。

一九四五年（ 二〇年） 六八歳 日本自由党結成（党首鳩山一郎）。

一九四六年（ 二一年） 六九歳 吉田内閣の国務大臣 新憲法に署名

一九四七年（ 二二年） 七〇歳 吉田内閣の内務大臣

一九五八年（ 三三年） 八一歳 外語学園理事長・外語学園ならびに信濃高等外語学院学校長。

一九六二年（ 三七年） 八五歳 病没。

#### 資料案内（『近現代日本人物史料情報辞典』吉川弘文館二〇〇四年刊から転載）

文書資料としてまとまったものはない。私宅および明治大学の戦災で戦前期資料の多くは焼失した。

自伝は『八十路の憶い出』（植原悦二郎回顧録刊行会、昭和三十八年）、伝記資料に追悼集『植原悦二郎と日本国憲法』（植原悦二郎十三回忌記念出版刊行会、昭和四十九年）、伝記に高坂邦彦『清沢洌と植原悦二郎』（銀河書房新社、平成十三年）、長尾龍一編『植原悦二郎集』（信山社、平成十六年）所収の解説などがある。

言論活動の資料としては、The Political Development of Japan (London, Constable and Co., 1910)、『日本民権発達史』（政教社、大正五年、のち日本民主協会、昭和三十三年再版）、『日本民権発達史』二〜四巻（日本民主協会、昭和三十三年―三十四年）、『現行憲法と改正憲法』（昭和二十一年）などの著書の他、大正期に雑誌『国家及国家学』『第三帝国』『東洋時論』『新公論』『新小説』などに掲載した諸論文がある。

研究書に松尾尊允『大正デモクラシー』（岩波書店、昭和四十九年）、宮本盛太郎「植原悦二郎における国民主権論の形成」（『日本人のイギリス観』御茶の水書房、昭和六十一年）、高坂邦彦『清沢洌と植原悦二郎』（銀河書房新社、平成十六年）などがある。

（長尾龍一）